HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コリマ・ユカギール語における名詞項標示
Author(s)	長崎, 郁
Citation	北方言語研究, 4, 19-31
Issue Date	2014
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55102
Type	departmental bulletin paper
File Information	nls-4-03.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 4:19-31（北方言語ネットワーク編，北海道大学大学院文学研究科，2014）

［特集　名詞項標示］

コリマ・ユカギール語における名詞項標示

長 崎　郁
（国立国語研究所）

1. はじめに

コリマ・ユカギール語（北東シベリア、系統不明）の名詞項（主語と目的語）はいずれも複数の形式により示され、名詞項とそれを示す形式が、「主語＝主格」、「目的語＝対格」のように一対一に対応しない。本稿の目的は、このような名詞項における複数の標示形式の選択に関わる様々な要因について記述と分析を行うことである[1]。この問題は Krejnovich（1982）、Maslova（2003）といった先行研究により、すでにある程度まで整理されているが、その詳細については未だ検討の余地がある。

本稿の構成は次の通りである。第 2 節では名詞項標示の選択に関連する 2 種類の構文（定動詞文と焦点構文）の概略を示す[2]。定動詞文と焦点構文は、名詞項の表す内容の談話上の重要度により選択され、それに伴って標示形式の選択肢の範囲が決まる。第 3 節では定動詞文における目的語の標示形式の使い分けについて、第 4 節では焦点構文における自動詞主語と目的語の標示形式の使い分けについて扱う。第 5 節において本稿のまとめを行う。

2. 定動詞文と焦点構文

コリマ・ユカギール語は接尾辞の添加を主要な形態的手段として用いる膠着的な言語である。主要部後行型、他動詞文の基本語順は AOV だが、固定的ではない。名詞項は特に言う必要がなければ省略されることが多いが、その代わりに、動詞における主語の人称・数の標示がごくわずかな例外をのぞき必須である。

コリマ・ユカギール語の名詞項標示について理解する上でまず重要なのは、定動詞文と焦点構文という 2 種類の構文の区別である。定動詞文では定動詞形の動詞が述語として用いられる。定動詞語尾の活用体系は 3 つの法、すなわち、直説法、命令法、疑問法に分かれ、直説法ではさらに自動詞の活用体系と他動詞の活用体系に分かれる。命令法は、話し手から聞き手または第 3 者への行為の要求・願望を表す法であり、疑問法は内容疑問文でのみ用いられる法である（ただし、主語が 2 人称または 3 人称の内容疑問文では直説法が用いられることもある）。以下、(1)、(2)に直説法、(3)、(4)に命令法、(5)、(6)に疑問法の

[1] 本稿で用いる主要なデータには、(1) ロシア、マガダン州セイムチャンとサハ共和国ネレムノエ村での筆者自身による現地調査で得られた資料と、(2) ロシアで刊行されたテキスト集である Nikolaeva（1989（I、II））、Nikolaeva（1997）が含まれる。(1) は基本的に音素表記を用いる。ただし、ロシア語からの借用語にはキリル文字をラテン文字に転写した表記を用いることもある。音素目録は次の通りである： /i, e, ɵ, u, a, o, p, b, t, d, s, ʃ, ʒ, t’[tɕ〜ɕ], d’[tʑ], k, g, q[q〜χ], ʁ, r, m, n, n’[ɲ], ŋ, l, l’[ʎ], w, j/（/s/ が現れるのは、ほぼ借用語に限られる）。Nikolaeva（1989）からの引用例は、キリル文字をラテン文字（音素表記）に転写して示す。また、Nikolaeva（1997）のラテン文字表記は筆者の表記と若干異なる点があるが、引用の際には /ə/ および /s’/ をのぞき筆者の表記に転写して示す。引用の際のグロスと和訳は筆者による。

[2] 従属的な節での名詞項標示は主節と異なる場合があるが、本稿では主節での現象に議論を限定する。

それぞれ自動詞と他動詞の例を示す。これらの例から明らかなように、名詞項が明示的な接辞によって示される場合、その分布は主格・対格型で、目的語に明示的標示がなされる。ここでは、ボールド体で示した目的語に具格 *-(l)e* が現れている点に注意されたい。

(1) *pulun-die* *kie-t'.*
老人-DIM 来る-IND.INTR.3
「おじいさんが来た」

(2) *tudel* *iidejnede* ***tabaaq-e*** *oozaa-nu-m.*
3SG ときどき たばこ-INS 飲む-IPFV-IND.TR.3
「彼はときどきタバコを吸う」

(3) *tudel* *kel-gen*
3SG 来る-IMP.3
「彼が来るように（彼に来させなさい）」

(4) *met-in* ***kinige-le*** *ket'ii-gen*
1SG-DAT 本-INS 持って来る-IMP.3
「［彼が］私に本を持ってくるように（彼に本を持って来させなさい）」

(5) *tudel* *qamlid'e* *tiŋide* *ewre?*
3SG 何回 ここへ 来る:INTERR.3
「彼は何度ここへ来たか？」

(6) *kin* ***nume-le*** *aa?*
誰 家-INS 作る:INTERR.3
「誰が家を建てたのか？」

焦点構文は、Krejnovich（1982）などの先行研究が指摘するように、自動詞主語または目的語の内容を問う場合とその答えで義務的に用いられる[3]。民話などの語りでは、これらの名詞項の指示物を新たに談話に導入する際、また、対比的な状況の描写などでしばしば用いられる。つまり、コリマ・ユカギール語における焦点構文とは、自動詞主語または目的語を焦点化のターゲットとする（これらの名詞項の内容全体または内容の一部が談話上、重要な情報であることを文法的に示す）統語的手段である[4]。以下、(7)は自動詞主語が焦点化された例、(8)は目的語が焦点化された例である。焦点構文では焦点化された名詞項が焦点接辞により示されることがある（焦点化された名詞項をボールド体で示す）。すなわち、その分布は能格・絶対格型である。ただし一般的な能格言語とは異なり、コリマ・ユカギール語の焦点構文では、他動詞主語ではなく、自動詞主語と目的語に明示的標示がなされ

[3] 他動詞主語を含むその他の文構成素の内容を問う場合は、疑問法（または直説法）の定動詞文が用いられることに注意されたい（例(5)、(6) を参照）。
[4] さらに詳細な用法の分析は今後の課題である。

るということになる。名詞項の焦点化に伴って、焦点構文の述語動詞は定動詞形ではなく、分詞形となるが、焦点化されるのが自動詞主語なのか目的語なのかにより、異なった分詞形が用いられる。本稿では自動詞主語の焦点化で現れる分詞を L 形、目的語の焦点化で現れる分詞を ME 形と呼ぶことにする。

(7)　***kin-tek***　*kelu-l?*　**—**　***erpeje-lek***　*kelu-l.*
誰-FOC　来る-L　エウェン-FOC　来る-L
「誰が来たのか？　— エウェン人が来た」

(8)　*tet*　***lem-dik***　*oɔɜe-t-me?*　**—**　*met*　***t'aaj-ek***　*oɔɜe-t-me.*
2SG　何-FOC　飲む-FUT-ME.2SG　1SG　お茶-FOC　飲む-FUT-ME.1SG
「あなたは何を飲みますか？— 私はお茶を飲みます」

以上で概観したとおり、コリマ・ユカギール語では、自動詞主語／目的語の談話上の重要度により構文タイプが決まる。そして、それと同時に名詞項の標示形式の選択肢の範囲が決まる[5]。ここで選択肢の範囲と述べたのは、定動詞文の目的語の標示には主格・対格・具格のいずれかが、焦点構文の自動詞主語／目的語の標示には焦点接辞・主格のいずれかが現れるからである。以下、定動詞文における目的語、焦点構文における自動詞主語／目的語の順に、これらの選択に関わる要因を検討する。

3. 定動詞文における目的語の標示形式の選択

目的語に対する複数の標示（DOM）は、目的語の標示がそれ自身のもつ性質（local な要因）によって決定されるタイプと、主語と目的語との関係（global な要因）によって決定されるタイプに大別されるが（de Swart 2006: 264、Malchukov and de Swart 2009: 348）、本節で見るように、コリマ・ユカギール語の定動詞文における目的語の標示形式の選択においては、local な要因と global な要因が共存している。

3.1 主格目的語と対格／具格目的語 — global な要因

定動詞文の目的語は主格（明示的格接辞をもたない）になったり、対格や具格という明示的格接辞を伴ったりするが、その選択は global な要因によって決まる。遠藤（1998、2005: 114）は、これに関して「1 人称・2 人称＞3 人称」という人称の階層を提案している。言い換えれば、「談話参与者＞非談話参与者」ということになる[6]。階層に基づいた目的語の標示の具体的な現れのパターンは次の[A]〜[C]の通りである。

[A] 主語が談話参与者で目的語が非談話参与者、つまり、談話参与者から非談話参与者へ向かう行為では、目的語に主格が現れる。

[5] Maslova（2003: 458）は、コリマ・ユカギール語は「S/O の表す参与者に焦点が置かれているか否かを主節に標示する言語である」と述べている。
[6] この階層には単複の違いは関係しない。

(9) *tadii-delle* *tudel* *immu-te-j,* *met* ***tudel***
与える-CVB.SEQ 3SG 酔っぱらう-FUT-IND.INTR.3 1SG 3SG
kudede-t.
殺す-FUT:IND.TR.1SG
「[酒樽を] やったら彼は酔っぱらうだろう、(そうしたら) 私は彼を殺してやる」
(Nikolaeva 1989(II): 14)

(10) ***taŋ*** ***t'olʁoro*** *met* *t'aaʃet* *nug-u-t,* *mon-i.*
その ウサギ 1SG 今 見つける-E-FUT:IND.TR.1SG 言う-IND.INTR.3
「そのウサギを私は今に見つけてやる、[と彼は] 言った」

[B] 主語も目的語も談話参与者、つまり、談話参与者から別の談話参与者へ向かう行為では、目的語に対格 *-ul* が現れる。対格接辞 *-ul* は、この[B]のパターンでのみ用いられるため、実質的には 1 人称と 2 人称の人称代名詞にしか付かない。後述するように、[A]、[B]以外のパターンでは異なった対格接辞 *-gele*〜*-kele*〜*-jle* が用いられる。

(11) *el=kej-te-jmet*[7] *tit* *qorobo,* *met* ***tit-ul***
NEG=くれる-FUT-IND.INTR.2PL 2PL 牛(Rus.) 1SG 2PL-ACC
kudde-t.
殺す-FUT:IND.TR.1SG
「お前たちの牛をよこさなければ、私はお前たちを殺してやる」

(12) *pieter berbekin,* *tet* ***met-ul*** *qamie-k.*
ピエテル・ベルベキン 2SG 1SG-ACC 手伝う-IMP.2
「ピエテル・ベルベキンよ、お前は私を手伝え」

[C] 主語が非談話参与者、つまり、非談話参与者から談話参与者へ向かう行為、あるいは、非談話参与者から別の非談話参与者へ向かう行為では、目的語は対格 *-gele*〜*-kele*〜*-jle* か具格 *-(l)e* のいずれかで示される (前節の例 (2)、(4)、(6)も参照されたい)。

(13) *pieter berbekin* ***met-kele*** *qamie-m,* *mon-i.*
ピエテル・ベルベキン 1SG-ACC 手伝う-IND.TR.3 言う-IND.INTR.3
「ピエテル・ベルベキンが私を手伝ってくれた、[と彼は] 言った」

(14) *taat* ***aŋd'e-le*** *joʁodaj-m,* ***tude*** ***terike-gele*** *t'itte t'umu*
そして 目-INS 開ける-IND.TR.3 3SG:GEN 妻-ACC すっかり

[7] 直説法の否定文では、他動詞も自動詞活用する。これは、他動性の程度が低くなることを反映した現象と見なすことができる (Hopper and Thompson 1980)。ただし、否定文であることは、名詞項標示には影響を与えない。

t'ine-l'el-u-m.
叩き切る-INFER-E-IND.TR.3
「そして［彼は］目を開けた、自分の妻をすっかり叩き切ってしまっていた」

3.2 対格目的語と具格目的語 — local な要因

前節[C]で示した通り、主語が非談話参与者の場合には、目的語の標示に対格が現れたり具格が現れたりする。2 つのうちどちらが選ばれるか、あるいはどちらが選ばれ易いかは、目的語自身のもつ性質（local な要因）による。

3.2.1 対格が義務的な名詞句タイプ

次の 3 つの名詞句タイプでは、対格が義務的である。

(15) 固有名詞

pieter berbekin-gele	*jan-ŋaa*	*...,*	*pochta-ŋin,*	*pochta*
ピエテル・ベルベキン-ACC	送る-PL:IND.TR.3		郵便(Rus.)-DAT	郵便(Rus.)

qon-to-din.
行く-CAUS-CVB.PURP
「[彼ら（＝人々）は］ピエテル・ベルベキンを送った...、郵便をとりに、郵便を運ぶために」

(16) 人称代名詞

pieter berbekin	***met-kele***	*qamie-m,*	*mon-i.*	= (13)
ピエテル・ベルベキン	1SG-ACC	助ける-IND.TR.3	言う-IND.INTR.3	

「ピエテル・ベルベキンが私を助けてくれた、［と彼は］言った」

(17) 指示代名詞

pieter berbekin	*bystro*	***tamun-gele***	*lodka-ŋoon*
ピエテル・ベルベキン	すばやく(Rus.)	それ-ACC	ボート(Rus.)-ESS

aa-m.
作る-IND.TR.3
「ピエテル・ベルベキンはすばやくそれでボートを作った（それをボートにした）」

上で挙げた名詞句タイプには人称代名詞、指示代名詞が含まれることから、他の代名詞のふるまいも同様なのではないかという疑問が生じる。しかし、他の代名詞では対格は義務的ではない。例えば、疑問代名詞 *leme*「何」には、全部否定の用法（クリティック *n'e=* を伴う）で、(18)のように対格が現れた例も、(19)のように具格が現れた例も見られる[8]。

[8] 用例数は具格が現れた例の方が対格よりも圧倒的に多い。不定では具格が現れ易いためである（3.2.2 を参照）。

(18) *tat* *paʁunu-ŋi,* *paʁunu-t* ***n'ə=leme-dee-gələ***
そして 漁をする-PL:IND.INTR.3 漁をする-CVB NEG=何-DIM-ACC
əl=idə-ŋi, *irkin=də* *anil-ə.*
NEG=捕まえる-PL:IND.INTR.3 1つの=CLT 魚-INS
「そして［彼は］漁をした、漁をしたが何も捕まえなかった、1匹の魚も」
（Nikolaeva 1997: 31）

(19) …, *n'e=qodo* ***n'e=leme-le*** *el=juə.*
NEG=どのように NEG=何-INS NEG=見る:IND.INTR.3
「…、［彼は］決して何も見なかった」（Nikolaeva 1989(I): 76）

3.2.2 限定要素の有無か定性か？

上記の3つの名詞句タイプに該当しない名詞句において、対格と具格の選択を決める要因に関し、これまでの研究では、限定要素の有無によるという指摘（Krejnovich 1982）と、名詞句の定性によるという指摘（Maslova 2003、遠藤 2005、長崎 2009；2010）がなされてきた。前者は、名詞句が従属部または所有者人称接辞[9]のような限定要素を伴えば対格、伴わなければ具格になるとするものであり、後者は、定の名詞句ならば対格、不定の名詞句ならば具格になるとするものである[10]。以下では、これら2つの指摘について用例を検討する。

Nikolaeva（1989）には、問題となる定動詞文（非談話参与者を主語とし、人称代名詞・指示代名詞・固有名詞以外の名詞が目的語となった定動詞文）が309例ある。まず、これらの用例において、目的語が限定要素を伴うか否かによって対格と具格がどのように分布しているかを調べた（表1）[11]。この結果から、［＋限定要素］では対格の現れることが圧倒的に多く（211例中195例（92%））、［−限定要素］では具格の現れることの方がかなり多い（98例中69例（70%））ことが分かる。

表1 ［±限定要素］による対格と具格の分布（Nikolaeva 1989）

	＋限定要素	−限定要素	計
対格	195	29	224
具格	16	69	85
計	211	98	309

[9] コリマ・ユカギール語の所有者人称接辞は3人称のものしかない（*emej-gi*［母-POSS.3］「彼／彼女の母」、*emej-de-n'e*［母-POSS.3-COM］「彼／彼女の母と」）。1人称・2人称の所有者は、人称代名詞を従属部として示すことにより表される（*met emej* 「私の母」）。
[10] 長崎（2009）では、定性に加えて有生性（「人間」対「非人間」）も格の選択に影響を与えている可能性があると述べたが、より多くの資料を検討してみると、有生性では有意な差が認められないことが分かった。
[11] 従属部が複数個ある場合は、1つとして数えた。

さらに、［＋限定要素］の名詞句について、限定要素のタイプを［＋人称代名詞・所有者人称接辞］、［＋指示的限定詞］、［＋その他］に分類した際の対格と具格の分布をまとめたのが表 2 である[12]。

表 2　限定要素のタイプによる対格と具格の分布（Nikolaeva 1989）

	＋人称代名詞・所有者人称接辞	＋指示的限定詞	＋その他	計
対格	114	45	36	195
具格	4	7	5	16
計	118	52	41	211

表 2 の結果を定性との関連から考えてみると、［＋人称代名詞・所有者人称接辞］あるいは［＋指示的限定詞］のように、限定要素のタイプから明らかに定と判断できる名詞句には対格が現れることが多い（前者は 118 例中 114 例（97%）、後者は 52 例中 45 例（87%）を対格が占める）。しかし、このような場合に具格が現れた例も全くないわけではない。以下、(20、21)は［＋人称代名詞・所有者人称接辞］の名詞句に対格が現れた例、(22、23)は同様の名詞句に具格が現れた例である。

(20) ［＋人称代名詞］→ 対格

emis'e-ge ***tude*** ***kenme-gele*** *t'obine-le* *kigie-m.*
暗闇-LOC 3SG:GEN 友達-ACC 槍-INS 突く-IND.TR.3
「［彼は］暗闇で自分の仲間を槍で突いた」（Nikolaeva 1989(II): 44）

(21) ［＋所有者人称接辞］→ 対格

tudel ***terike*** ***moʒuu*** ***nugen-dee-jle*** *el=juө,* *el=moj.*
3SG 妻 PRSP 手-POSS.3-ACC NEG=見る: IND.INTR.3 NEG=持つ:IND.INTR.3
「彼は（その）妻となるはずの者の手を見たことも握ったこともなかった」
（Nikolaeva 1989(I): 22）

(22) ［＋人称代名詞］→ 具格

ʃuukedie *aaj* ***tude*** ***lukil-e*** *mid'-u-m.*
カワカマス も 3SG:GEN 矢-INS 取る-E-IND.TR.3
「カワカマスも自分の矢を手にした」（Nikolaeva 1989(I): 32）

(23) ［＋所有者人称接辞］→ 具格

tamun *oo-l'el-te-j,* *mon-u-t,* *edies'-u-m*
それ COP-INFER-FUT-IND.INTR.3 言う-E-CVB 呼ぶ-E-IND.TR.3
n'uu-de-le.
名前-POSS.3-INS

[12] 従属部が複数個ある場合は、最初に現れた従属部のタイプを優先して数えた。また、主要部が所有者人称接辞を伴う場合は、他に従属部がある場合も、［＋人称代名詞・所有者人称接辞］として数えた。

「[そのクマが] それ（＝親戚の女の子供）なのかもしれない、と［彼は］言い、（そのクマの）名を呼んだ」（Nikolaeva 1989(I): 26）

［＋指示的限定詞］でも対格が現れることが多い(24)。しかし、具格が現れた例もわずかに見られる(25)。

(24) ［＋指示的限定詞］→ 対格

tintaŋ	***ad-u-l***	***igeje-pul-gele***	*kəd-u-m.*
先述の	固い-E-L	紐-PL-ACC	集める-E-IND.TR.3

「[彼は] そのしっかりした紐を集めた」（Nikolaeva 1989(II): 30）

(25) ［＋指示的限定詞］→ 具格

taŋ	***el=mer-uujii-l***	***nodo-le***	*ʃoromo-ŋin*	*tadii-ŋaa.*
その	NEG=飛ぶ-ITER-L	鳥-INS	人-DAT	与える-PL:IND.TR.3

「[彼ら（＝神々）は] その飛び回らない鳥を人間に与えた」（Nikolaeva 1989(I): 40）

［＋その他］の名詞句、および、従属部も所有者人称接辞も伴わない名詞句では、通常その定・不定を文脈によって判断するしかないが、その場合も定で対格、不定で具格という傾向が認められる。しかし、この対応は、やはり絶対的ではなく、例えば、不定の名詞句に対格が現れた(26-28)のような例も、定の名詞句に具格が現れた(29-31)のような例も見られる。

(26) 不定 → 対格

d'e	*taŋ*	*ʃoromo*	*kupets-ŋin*	*qon-delle,*	***irkin***	***bochka-gele***
INTJ	その	人	商人(Rus.)-DAT	行く-CVB.SEQ	1 つの	樽(Rus.)-ACC

mid'-u-m.
取る-E-IND.TR.3

「その人は商人のところへ行って、樽を 1 つ手に入れた」（Nikolaeva 1989(II): 12）

(27) 不定 → 対格

iile	*end'ood-e*	*ʃoromo-ŋin*	*tadii-ŋaa,*	***iile-pul-gele***
いくつかの	動物-INS	人-DAT	与える-PL:IND.TR.3	いくつか-PL-ACC

al'-pe-de-ge	*modo-ŋaa.*
そば-PL-POSS.3-LOC	住む-PL:IND.TR.3

「[神々は] 一部の動物を人間に与えた、一部を彼らのそばで暮らすようにした」（Nikolaeva 1989(I): 40）

(28) 不定 → 対格

aras	***legul-gele***	*t'umu*	*taa*	*ostool-ge*	*egete-m.*
様々な	食べ物-ACC	すべて	そこに	テーブル-LOC	立てる-IND.INTR.3

「[彼女は] 様々な食べ物をそのテーブルにならべた」（Nikolaeva 1989(I): 80）

(29) 定 → 具格

taat　　*aaj*　　*ajii-m,*　　***momuʃaa-le.***
そして　再び　射る-IND.TR.3　モムシャー-INS
「そして［そのオオライチョウは］再び射た、（その）モムシャーを[13]」
（Nikolaeva 1989(I): 32）

(30) 定 → 具格

qristos　　*tamun*　　*jolaat*　　***lebie-le***　　*omos'*　　*juө-m.*
キリスト　それ　　後から　地面-INS　よく　　見る-IND.TR.3
「キリストはその後で（天界から）地面（下界の地面）をよく見た」
（Nikolaeva 1989(I): 44）

(31) 定 → 具格

meemee　*taat*　　*ʃoromo-ge*　*jaqa-j.*　　***ʃoromo-le***　*el=l'uө-j.*
クマ　　そして　人-LOC　　着く-IND.ITR.3　人-INS　　NEG=見る-IND.INTR.3
「クマは（その）人のところに来た、（しかし）［彼には］（その）人が見えなかった」（Nikolaeva 1989(I): 60）

以上のように、人称代名詞・指示代名詞・固有名詞という名詞句タイプをのぞいた名詞句では、限定要素の有無も定性も対格と具格の選択を決める絶対的な要因とはなっておらず、どちらも傾向を示すものとして有効であるとしか言えない。両者に加えて何らかの別の条件も働いている可能性も含め、今後さらに調査を続けたい。

4. 焦点構文における自動詞主語／目的語の標示の選択

2 節で述べたように、焦点構文における焦点化された名詞項（自動詞主語／目的語）には焦点接辞 *-(le)k*～*-ek*（前者は母音の後、後者は子音の後に現れる）か主格のどちらかが現れる[14]。両者のうち、焦点接辞がデフォルトの形式と見なしうるのに対して、固有名詞(32)、3 人称の人称代名詞(33)、定の所有者を示す限定要素を伴う名詞句(34)では、主格が義務的に現れる[15]。

(32)　a. ***iku***　　*kelu-l.*
イク　来る-L
「イクが来た」
b. *met*　　***nikolaj***　　*aŋt'ii-me.*
1SG　ニコライ　探す-ME.1SG
「私はニコライを探した」

[13] *momuʃaa*「モムシャー」とは、コイ科の魚の一種（*Catostomus catostomus*）のことである。ロシア語では *chukuchan* または *katalka* と呼ばれる。
[14] 焦点接辞と主格は、名詞述語（「X は Y である」）でも同様の分布を示す。
[15] 意味的に有標の場合に標識がゼロとなることに注意されたい。

(33) a. ***tudel*** *kelu-l.*
3SG 来る-L
「彼が来た」
b. *met* ***tudel*** *jan-me.*
1SG 3SG 送る-ME.1SG
「私は彼を行かせた」

(34) a. ***terike-gi*** *taat* *l'ie-nnu-l.*
妻-POSS.3 そのように いる-HBT-L
「彼の妻がそういう風だったんだ」
b. ***titte*** ***uʁr-pe*** *jal-l'el-mele* *t'art'aqan-die.*
3PL:GEN 子供-PL 送る-INFER-ME.3 チャルチャカン-DIM
「自分たちの子供を行かせた、チャルチャカンは」（Nikolaeva 1989(I): 48）
c. ***met*** ***terike*** ***niŋiebun-gi*** *qodoo-l.*
1SG 妻 前掛け-POSS.3 横たわっている-L
「私の妻の前掛けがある」（Nikolaeva 1989(I): 70）
d. *d'e,* *kebe-t'* *t'uul'd'ii pulut,* ***debegej*** ***t'oʁoje*** *mundej-mele.*
INTJ 去る-IND.INTR.3 人喰い鬼 デベゲイ ナイフ 取りに行く-ME.3
「去った、人喰い鬼は、デベゲイのナイフを取りに行った」

このように、焦点構文においても焦点化された名詞句の標示形式を決めるのは、名詞句のもつ性質（local な要因）である。ただしこの local な要因は、定動詞文において対格と具格の選択を決める際のそれとは、部分的な重なりを見せながら、さらに狭い範囲に限られている。すなわち、代名詞の中でも主格が義務的なのは 3 人称の人称代名詞に限られ、(35)、(36)に見るように、1 人称・2 人称の代名詞、指示代名詞を含むその他の代名詞では焦点接辞が現れる（疑問代名詞については、2 節の例(7)、(8)を参照されたい）。また、所有者が限定要素であっても、(37)のようにそれが不定の所有者であれば焦点接辞が現れる。

(35) *taŋnigi* ***tet-ek*** *lek-te-mle,* *mon-i.* *taat*
そのとき 2SG-FOC 食べる-FUT-ME.3 言う-IND.INTR.3 そして
tamun *jalaat* ***met-ek*** *lek-te-mle.*
それ 後から 1SG-FOC 食べる-FUT-ME.3
「そしたら［彼女は］お前を食べるだろう、［彼は］言った。そしてその後で私を食べるだろう」

(36) *met* *aŋd'e* *eruu-ge* ***tabud-ek*** *emtedej-nu-me, ...* *tiŋ* *sumaa-ge*
1SG 目 悪い-LOC それ-FOC 治療する-IPFV-ME.1SG この 大袋-LOC
ʃoʁoo-t, *mon-i.*
入っている-CVB 言う-IND.INTR.3
「私は目が悪いので、それを治療している、…この大袋に入って、［と彼は］言っ

た」

(37) *taat* *qon-u-t,* ***ill'el*** ***foromo*** ***t'uge-k*** *num-mele.*
そして　行く-E-CVB　新たな　人　足跡-FOC　見つける-ME.3
「そして［彼は］行って、<u>他の人の足跡を</u>見つけた」（Nikolaeva 1989(II): 44）

5. まとめ

以上、コリマ・ユカギール語における名詞項に対する複数の標示形式の選択の要因について見てきた。本稿での記述・分析は以下のようにまとめられる。

コリマ・ユカギール語では、まず自動詞主語／目的語の談話上の重要度により構文タイプ（定動詞文か焦点構文か）が決まる。定動詞文が選ばれた場合には、目的語の標示の選択に、まず主語と目的語の関係という global な要因が働き、「談話参与者＞非談話参与者」という階層に従って目的語に明示的な標示がなされるか否か（主格（明示的格接辞をもたない）か対格・具格か）が決まる。目的語の標示には、次に目的語自身の性質という local な要因が働く。このときに優先されるのは特定の名詞句タイプ（人称代名詞、固有名詞、指示代名詞）であり、該当すれば義務的に対格が現れる。これに該当しない名詞句では、限定要素の有無・定性が対格と具格の現れを傾向づけている。一方、焦点構文においては、焦点化された自動詞主語／目的語に焦点接辞が現れるか主格が現れるか選択に、local な要因が働いており、固有名詞、3 人称の人称代名詞、定の所有者を限定要素とする名詞句では主格が義務的に現れ、そうでなければ焦点接辞が現れる。つまり、定動詞文での local な要因の内容と焦点構文のそれは全く同じではない。前者は後者よりもさらに狭い範囲の名詞句に限られている。

略号一覧

-: 接辞境界
=: クリティック境界
1,2,3: 人称
ACC: 対格
CAUS: 使役
CLT: クリティック
COP: コピュラ
CVB: 副動詞
DAT: 与格
DIM: 指小
E: 挿入音
ESS: 様格
FOC: 焦点
FUT: 未来
GEN: 属格
HBT: 習慣
IMP: 命令法
IND: 直説法
IINFER: 推量
INS: 具格
INTERR: 疑問法
INTJ: 間投詞
INTR: 自動詞
IPFV: 不完了
JE: 分詞 JE 形
L: 分詞 L 形
LOC: 位格
ME: 分詞 ME 形
NEG: 否定
PL: 複数
POSS: 所有者人称
PRSP: 予期
PURP: 目的
Rus.: ロシア語の要素
SEQ: 継起
SG: 単数
TR: 他動詞

参考文献

遠藤史. 1998.「北方諸言語における人称の反転」『和歌山大学経済学部 研究年報』２号、1-21.

————. 2005. 『コリマ・ユカギール語の輪郭 − フィールドから見る構造と類型』名古屋、三恵社.

Jochelson, Waldemar. 1905. Essay on the grammar of the Yukaghir language. *American anthropologist*, new series 7(2), 369-424.

Hopper, Paul and Sandra A. Thompson. 1980. Transitivity in grammar and discourse. *Language*, 56(2), 251-299.

Krejnovich, Erukhim A. 1979. Jukagirskij jazyk. In: *Jazyki Azii i Afriki*, III, 348-369. Moscow: Nauka.

————. 1982. *Issledovanija i materialy po izucheniju jukagirskogo jazyka*. Leningrad: Nauka.

Malchukov, Andrej and Peter de Swart. 2009. Differential case marking and actancy variations. In: Andrej Malchukov and Andrew Spencer (eds.) *The Oxford handbook of case*, 339-355. Oxford University Press.

Maslova, Elena. 2003. *A grammar of Kolyma Yukaghir*. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.

————. 2010. Case in Yukaghir languages. In: Andrej Malchukov and Andrew Spencer (eds.) *The Oxford handbook of case*, 789-796. Oxford University Press.

長崎郁. 2009.「コリマ・ユカギール語の記述研究 ―形態論を中心に―」(2008 年度千葉大学大学院社会文化科学研究科提出学位請求論文).

————. 2010.「コリマ・ユカギール語の関係節における 3 種類の分詞」呉人惠（編）『環北太平洋の言語』第 15 号、17-30. 富山大学人文学部.

Nagasaki, Iku. 2011. Kolyma Yukaghir. In: Yasuhiro Yamakoshi (ed.) *Grammatical sketches from the field*, 213-256. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.

Nikolaeva, Irina. (ed.) 1989. *Fol'klor jukagirov Verxnej Kolymy*, I-II. Yakutsk: Yakut State University Press.

————. (ed.) 1997. *Yukaghir texts*. Specimina Sibirica 13. Szombathely, Savariae.

de Swart, Peter. 2006. Case markedness. In: Leonid Kulikov, Andrej Malchukov and Peter de Swart (eds.) *Case, valency and transitivity*, 249-267. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Core Argument Marking in Kolyma Yukaghir

Iku NAGASAKI
(National Institute for Japanese Language and Linguistics)

Kolyma Yukaghir (Paleosiberian) has been characterised as a language with a complicated system of core argument marking (Krejnovich 1982, Maslova 2003). The language has two different construction types: a finite and a focus construction. The choice of construction is determined by the discourse prominence of the core arguments, and each construction shows a number of possibilities for marking them.

In the finite construction, the object can be marked by the nominative (i.e. zero), accusative (*-gele, -ul*), or instrumental cases (*-(l)e*). The choice between zero marking (nominative) and non-zero marking (instrumental/accusative) on the object is conditioned by the "global" factor (Malchukov & de Swart 2009), i.e. the relative position of the subject and object in the person hierarchy (discourse participant > non-participant). On the other hand, the specific choice between instrumental and accusative cases on the object is conditioned by "local" factors in Malchukov & de Swart's terms: that is, by certain properties of particular object NPs, such as NP type (proper nouns, personal pronouns, and demonstrative pronouns), definiteness or existence of attributive elements, etc.

In the focus construction, the focused argument, either intransitive subject or object, triggers the use of the predicate in a special attributive form instead of the finite form. The focused argument itself may be marked either with the focus marker (*-(le)k/-ek*) or with nominative case, which is the same as the marking with nominal predicates. The choice between the two is also conditioned by local factors, but these are different from those determining the choice of instrumental and accusative cases in the finite construction. Only a few types of NPs, i.e. proper nouns and third person pronouns, and also nouns with attributive definite-possessor take nominative marking instead of the focus marking; others take the focus marking.

（ながさき・いく　inaga@ninjal.ac.jp）